

なぜ大学にミュージアムがあるのか

天理参考館（以下、当館）は博物館であると、その成り立ちについて前回紹介した。今回はさらに大学附属の博物館であることについて述べたい。

昨今、大学が博物館の整備に力を入れている。附属の博物館が収蔵する資料群が、大学の魅力を発信する一つのツールになっているのがその理由だ。大阪大学総合博物館の約45万年前の地層で見つかった巨大ワニ「マチカネワニ」の全身化石など、収蔵品のなかにはそれぞれ「お宝」も少なくない。

関西の主な私立大学附属博物館としては、関西学院大学博物館（2014年開館）、ハリス理化学館同志社ギャラリー（2013年開館）、龍谷ミュージアム（2011年開館）、関西大学博物館（1994年開館）、立命館大学国際平和ミュージアム（1992年開館）などがある。ここ20年の間に大学ミュージアムに注目が集まり、整備創設されたことがよくわかる。前回からの繰り返しになるが、当館の創設は1930年である。天理大学の前身、天理外国語学校のなかに設けられたのだから、大学ミュージアムとして群を抜いた歴史を有する。

なぜ大学に博物館があるのか？ それは、各大学が学生を教育する目的で購入、あるいは寄贈を受けた資料をはじめ、教員が研究の過程で収集した学術標本資料が数多く集積しているためである。現在は海外から文化財や標本を自由に持ち込むことが困難になっており、研究資源の国家的な困り込みが顕著になっている。ゆえに各大学が有する学術資料を資源として有効に活用しなければならない。そのために公開し、活用できる大学ミュージアムが必要となってくる。設置の流れとしては、少し前によく見られたような、まず建物を作って、そこに入れる資料を集めようとするのではなく、資料があらかじめ集まっただけで、それらを保存・展示するための施設として創設されるという事例が多い。

しかし大学ミュージアムの展示品は、学術標本資料と言えば格好良く聞こえるが、その価値は研究者にしか分からないものも少なくない。一般の来館者から見て「？」のようなものを並べても面白くないのは当然である。当館ではそもそも創設の趣旨が「布教のためには、その土地の言葉を習得するだけでなく、その背景にある人々の考えや生活文化への理解が必要であるから、日常生活で使われている道具を主に収集して見せる」ため、展示資料がだれにも親しみやすいものとなっている。

当館の展示面積2463㎡は、2001年に開館した京都大学総合博物館の2470㎡に匹敵する。また収蔵資料点数約30万点は大学ミュージアムとしては国内屈指で、地方国立大学をも凌ぐ規模と言える。1996年開館の東京大学総合研究博物館の600万点には遠く及ばないが、その点数は東大が帝国大学であった証であり、日本で唯一の大学だった時代に、国を挙げての標本収

集の結果が東大に集中しているのはある意味当然のことであろう。

大学ミュージアムが果たす役割

当館を含め大学ミュージアムで、標本だけでなく、教材や研究資料として蓄積されてきたさまざまな美術品や歴史資料など、文化遺産の数々を収蔵して、その収蔵品を展覧会というかたちで公開していることはあまり知られていないかもしれない。各大学ミュージアムの収蔵資料はその大学の特色、個性あるいは成り立ちを反映するものであるから、それぞれ固有の教育研究上の役割があることは言うまでもない。管内に幼稚園から大学までを有する本学附属の博物館として、各年齢に応じた展示案内やエントランスホールでのミュージアムコンサート、天理大学学生によるオープンキャンパスでの高校生相手の展示解説、こどもおぢばがえりでの世界各地の民族衣装を試着など、多彩な企画を開催している。



「建学の精神」授業で展示場案内中（2015年5月14日）

また、天理大学の博物館実習をはじめとする学芸員資格取得に関わる授業に協力しており、2回生を対象にした「建学の精神」授業を実施している。3グループに分かれて1階から3階まで各展示場を学芸員が展示解説を行った後、ワークシートを記入するという内容だが、その際必ず「今までに参考館に来たことがあるか」と質問することになっている。結果、「今回は初めて」という回答が多いのが実情である。天理大学学生は学生証の提示で何度でも無料で入館できる。大学ミュージアムは権威の殿堂でも、時間の止まった宝物館でもなく、すぐ身近にある、知を保存・継承して前進する拠点に他ならない。日本で、そして世界で、ここにしかない「お宝」が所狭しと並ぶ当館は、おぢばに帰参した方々、そしてすぐ横に通う学生にいつも開かれている。それゆえに名称は「天理大学附属天理参考館」なのである。